

Exhibit 145

朕青年學校敎練科等奎園令中改正ノ件ヲ裁可シ茲ニ
之ヲ公布セシム

御 名 御 璽

昭和十三年十一月三十日

内閣總理大臣	公爵	近衛	文	磨
海軍大臣		米内	光	政
文部大臣	男爵	荒木	貞	夫
陸軍大臣		板垣	征	四郎
拓務大臣		八田	嘉	明
外務大臣		有田	八	郎

勅令第七百三十九號

青年學校敎練科等奎園令中左ノ通改正ス

「兵役法施行令第三十一條第三項」ヲ「兵役法施行
令第三十四條第二項」ニ改ム

附 則

本令ハ公布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

參照

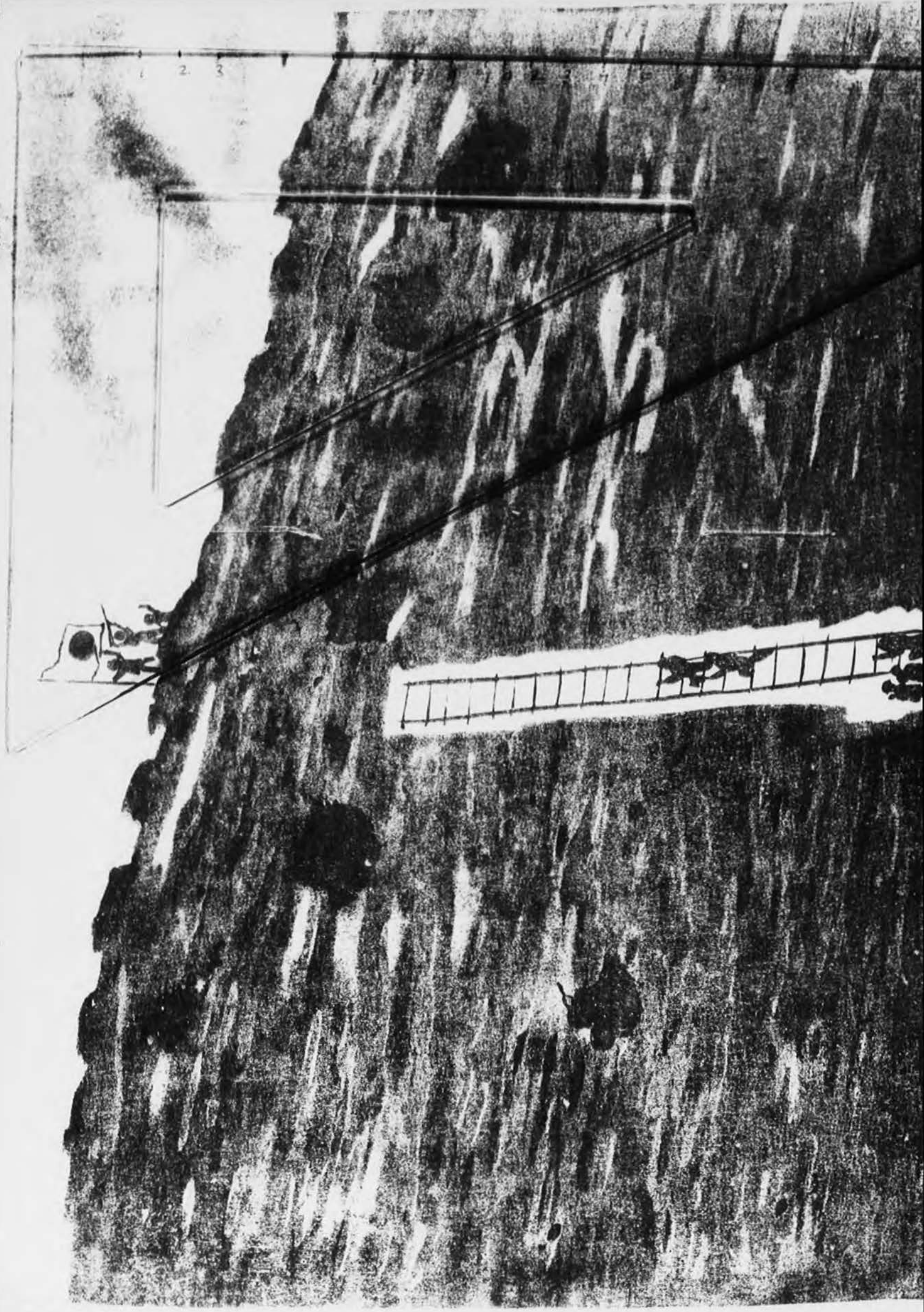
昭和十年八月十
日公布勅令第二百四十九號

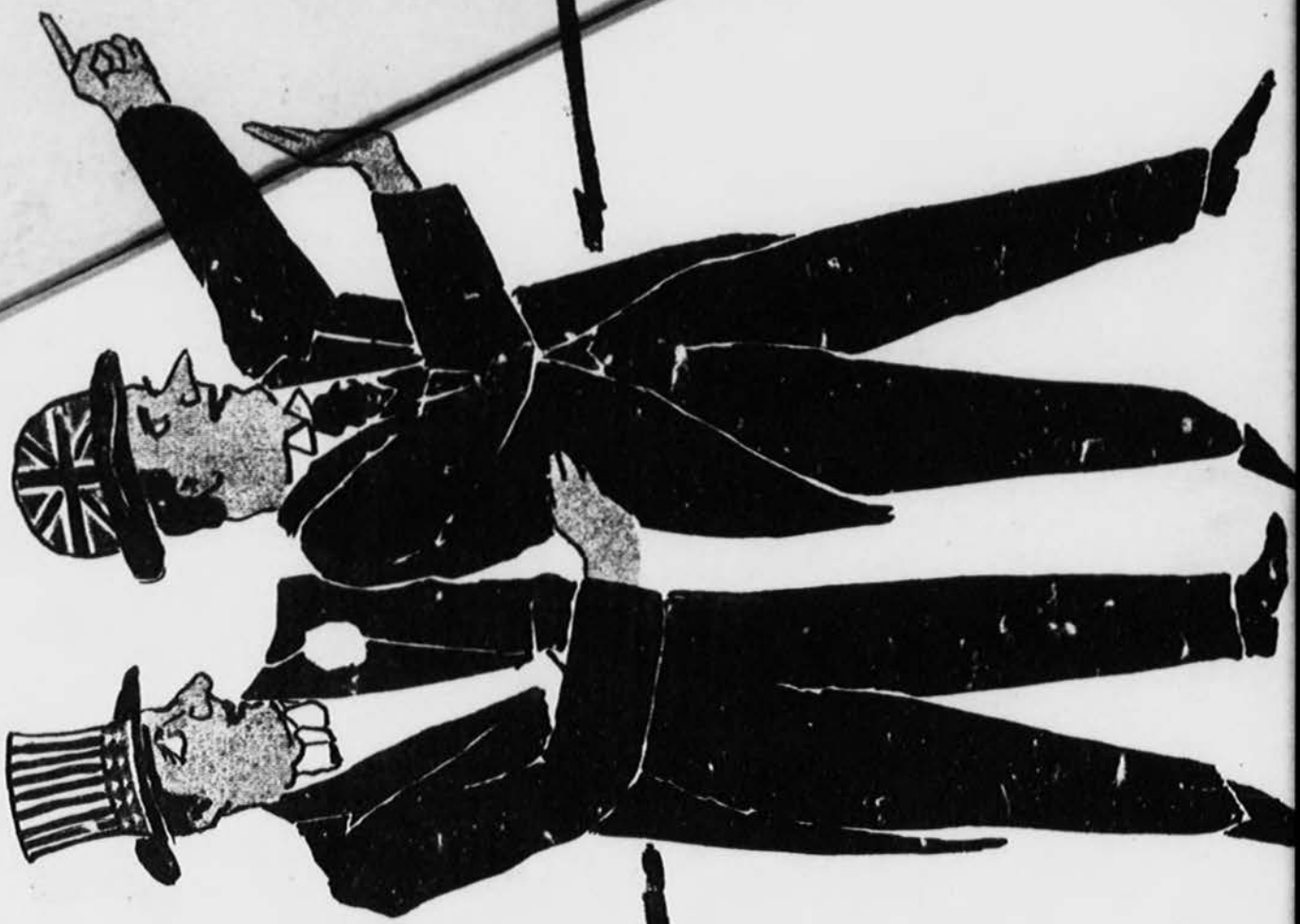
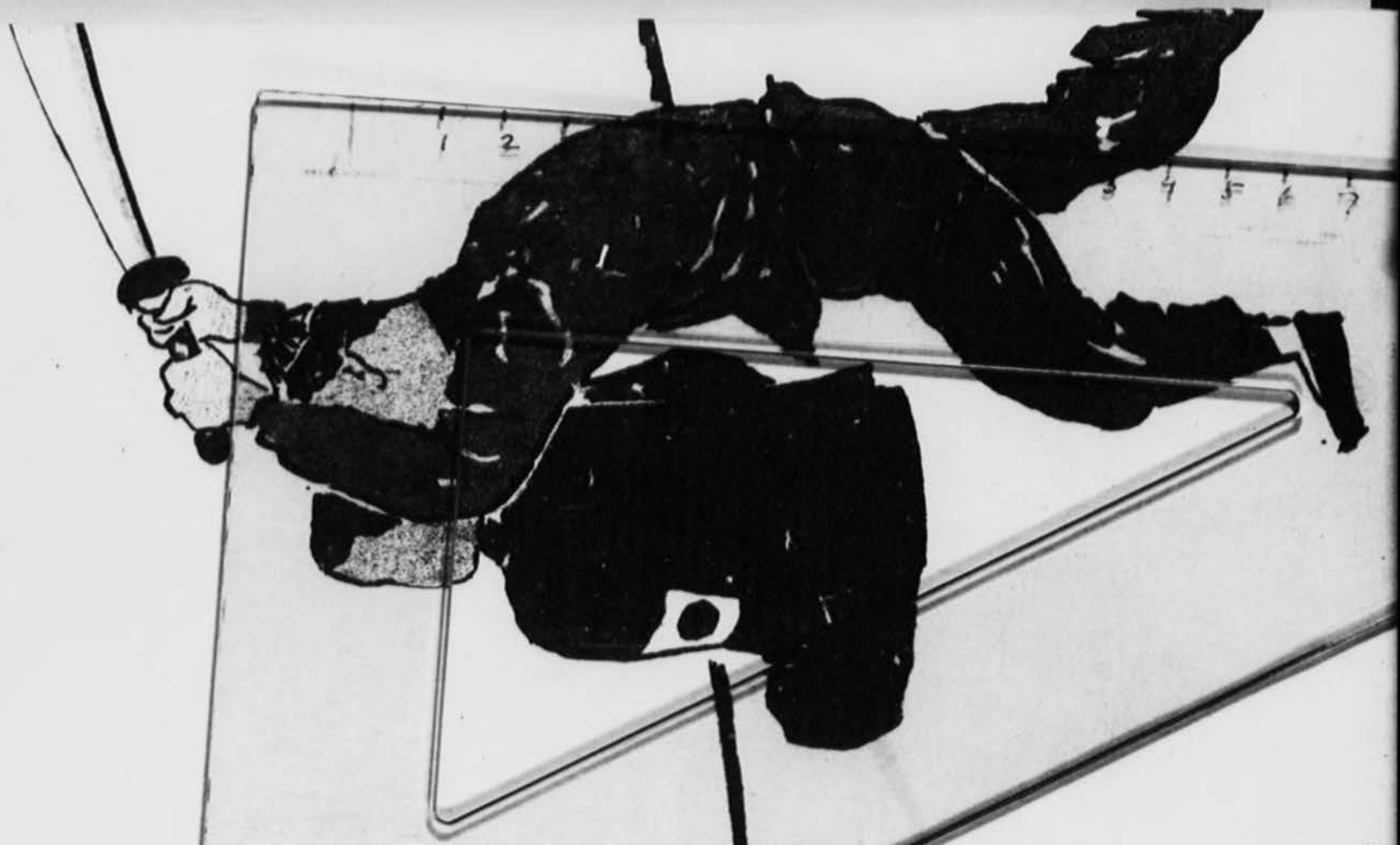
青年學校敎
練科等奎園令抄錄

陸軍大臣ハ陸軍現役將校ヲシテ青年學校令又ハ昭和

十年勅令第九十一號ニ依ル青年學校ニ於ケル教練科
 及兵役法施行令第三十一條第三項ノ規定ニ依リ其ノ
 課程ヲ青年學校ノ課程ト同等以上ト認定シタル學校
 (陸軍現役將校學校配屬令又ハ大正十四年勅令第二
 百四十六號ニ依リ陸軍現役將校ヲ配屬シタル學校、
 陸軍現役將校學校配屬令第五條第一項ニ攝グル學校
 及陸海軍所屬ノ學校ヲ除ク)ニ於ケル青年學校教練
 科相當科目ニ關スル奎圖ヲ爲サシムルコトヲ得









7117

撃ちあひ 叩きあひ 殺しあふ 日本と支那。

實力のある國民政府を打倒して 國權を恢復しようといふ

支那の國民運動が

横暴な英米の反對にぶつかつて

あれほど激しい排英運動、排米運動が起つたのに、

いつの間にか、その英米の狡い手にかゝつて、

「うむ、こいつ、敗れるものか！」

國權恢復の運動が

そのまゝ、抗日運動にすりかへられてしまつた

だが、もと／＼日本と支那とは

(さしこみぬく)

切つても切れない縁つゞき、

かけがいのない兄弟同志なのです。

對手を崖から突き落せば

一連託生 自分もつながつて

(はきながら)

ころげ落ちる。





7117

1717

(笑)

「しめく、どうも御苦勞様だつたね。

ては、東亞の寶物は

すまないけれど 遠慮のないさ。

取りはうだいで買つておくよ。」

兄弟喧嘩は他人の餌食。

第三國の思ふ壺。

仲直りが一日遅ければ 一日の損。

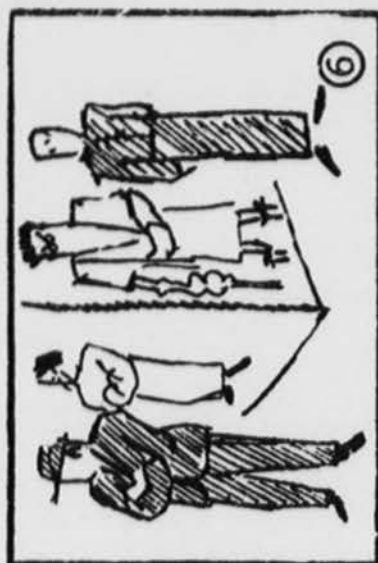
その損だけ 得をするのがちやんぷるのです。

(ぬきながら)

どうして こんなバカげた 悲しむべき状態が

はじまつたかといふさ





1717

7117

怖ろしい誤解！

その罪は もちろん両方にある。

支那は日本のほんたうの歴史、ほんたうの國民性を知らず

日本は また 隣組仲間である支那を輕蔑し、

お互に 色眼鏡をかけて 相手を見損つてゐた。

その隙に 第三國がうまくつけこむ。

これでは、仲好くできるはずがなく、

このまゝでは たゞひ戦ひには勝つても

ほんたうの平和な新東亞隣組は

いつまでたつても 出來はしません。

(おきながら)

支那兵は強い。





外人^{ぐわいじん}も舌^{した}を捲^く。

日清戦争^{にっしんせんそう}ごろはまるで違^{ちが}ふ。

ぐんぐん攻^せめてくる。

わが軍^{ぐん}が 樂々^{らくらく}勝^かつと思^{おも}つたら 大間違^{おほまちが}ひ。

(すつーとぬく)





もちろん わが軍は それ以上に強い。

大和魂の底力を出して

押して 押して 押しまくり、

到る處に 大勝利を得ました。

これからでも 敵が手向ふならどこまでも叩きつけます。

あ、しかし、

もしも

この強い支那と この強い日本とが

互に手をつなぎ

心を協せて

よその敵に當つたとしたら

どうでせう！

残念なことです。

いかにも 残念なことです。

だが 過ぎたところを いくら嘆いても 仕方がない。

これからです。

一時も早く 仲好くなります。

敵の間違ひはどこまでも叩き直す。

だが われくも よよく反省して

過ちを正されなければなりません。





1747

7117

「ううづ まづ 眼^め先^{さき}が おたやかだから

まア、心^{こころ}根^ねはあろまい」

冗^{じやう}談^{だん}ではない。

棚^{たな}から はたもちに降^ふつてきません。

こんな 生^{なま}ぬるい心^{こころ}構^{かま}へては

對^{あひて}手^ても、はたも べかにします。

對^{あひて}手^てを舐^なめてかゝる。

世^よの中^{なか}を舐^なめてかゝる。

これで りつばに國^{くに}が伸^のびると思^{おも}つたら大^{おほ}間^ま違^{まち}ひです。

(こつとぬきながら)

(オースマン)
「諸^{しよ}君^{くん}！」





7117

(ルーズベルト)
「米國の國防の第一線は重慶に在る！」

ルーズベルト大統領は叫んでゐます。

叫ぶばかりではない。

英米はかうして無數の武器や資材を送り

毎に億圓に當る金を重慶政府に貸し出してゐるのです

「支那をいつまでも闘はせ、疲れさせて、

甘い汁を吸ひ取りたいのです、

戦争の對手は、決して支那だけではないのです！

(そいつがねえながら)

世界をま。





7117

とがま

大轉だいてん

大動亂だいどうらん

今や世いまやよ

日獨爭にちどくそう

秩序の國々ちつじのくに々

維持の國々えいじのくに々

二つにふたつにわかれて

まぐさまぐさ 巴まぐさ 入いり亂れて黙もくいてゐるのです。

乗のるか 反はんるか

(ぬきながら)

この激流げきりゅうに棹さかさす日本にっぽんが





1747

7447

萬二

一

た、ま

大浪

世界の二

三千

ま、こ、何、を、察、す

しか、手、は、も、は、や、こ、ひ、つ、

大陸政策は、は、つ、ま、に、ま、

日獨伊三國同盟を結び、

東洋政策、油、戦、入、拔、

の、軍、を、ま、た、

進、





1117

7117

自分の（ちから）まっしゝら、

突き進んでゆくのです。

よその國を あてにしてはならない。

いゝ氣になつて 人に頼つては

結局はこの自力

自分の實力だけが ものを言ふのです。

力の無い國は 容赦なく押退される

といういふ 激しい 戦門なんだのです。

（ぬきながし）

南京攻略の（こう） 中華門の戦ひに



III

7117

自分^{じぶん} ^{まづ} ^し ^ら

突き進んでゆくのです。

よその國^{くに}を あてに ^て ^は ^な ^ら ^な ^い。

い、氣^きになつて 人^{ひと}に頼^{たの}つて ^な ^い。

結局^{けつぎ}はこの自^じ力^{りき}

自分^{じぶん}の實力^{じつりき}だけが ^も ^の ^を ^言 ^ふ ^の ^で ^す。

力^{ちから}あ^ない國^{くに}は 容赦^{ようしや}なく ^押 ^し ^や ^め ^ら ^れ ^る

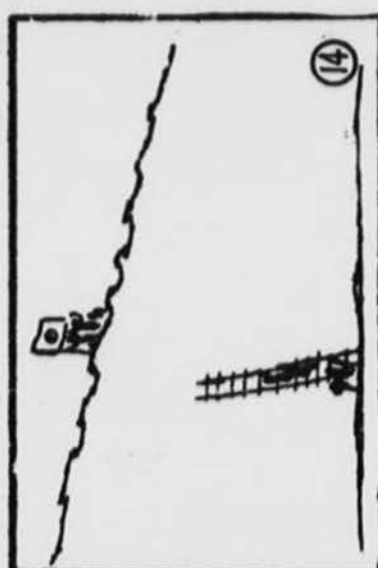
さういふ 激^{はげ}しい 戦^{せん}門^{もん}代^{だい}な^なの^で ^す。

(ぬきながら)

南京^{なんきん}攻^{こう}略^{りやく}のこゝ 中^{ちゅう}華^{くわ}門^{もん}の戦^{せん}ひに

1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20





2747

777

一番乗りの安藤伍長の率ゐた決死隊は

敵弾 雨ぞ降り注ぐ中を

高さ二十數メートルのそりたつ城壁に向つて

わづか 十四、五メートルの梯子を持つて

ぶつかつて行つた。

二十數メートルに十四、五メートル

雨霰の敵弾。

切りたつたやうな絶壁。

翼を振らぬ人間の身で、

残る十メートルをどうして登る。

(さしこみぬく)

あ 日章旗。

城頭高く 日章旗。

どこをどうしたか判らないが、こにかく登つてしまつた。

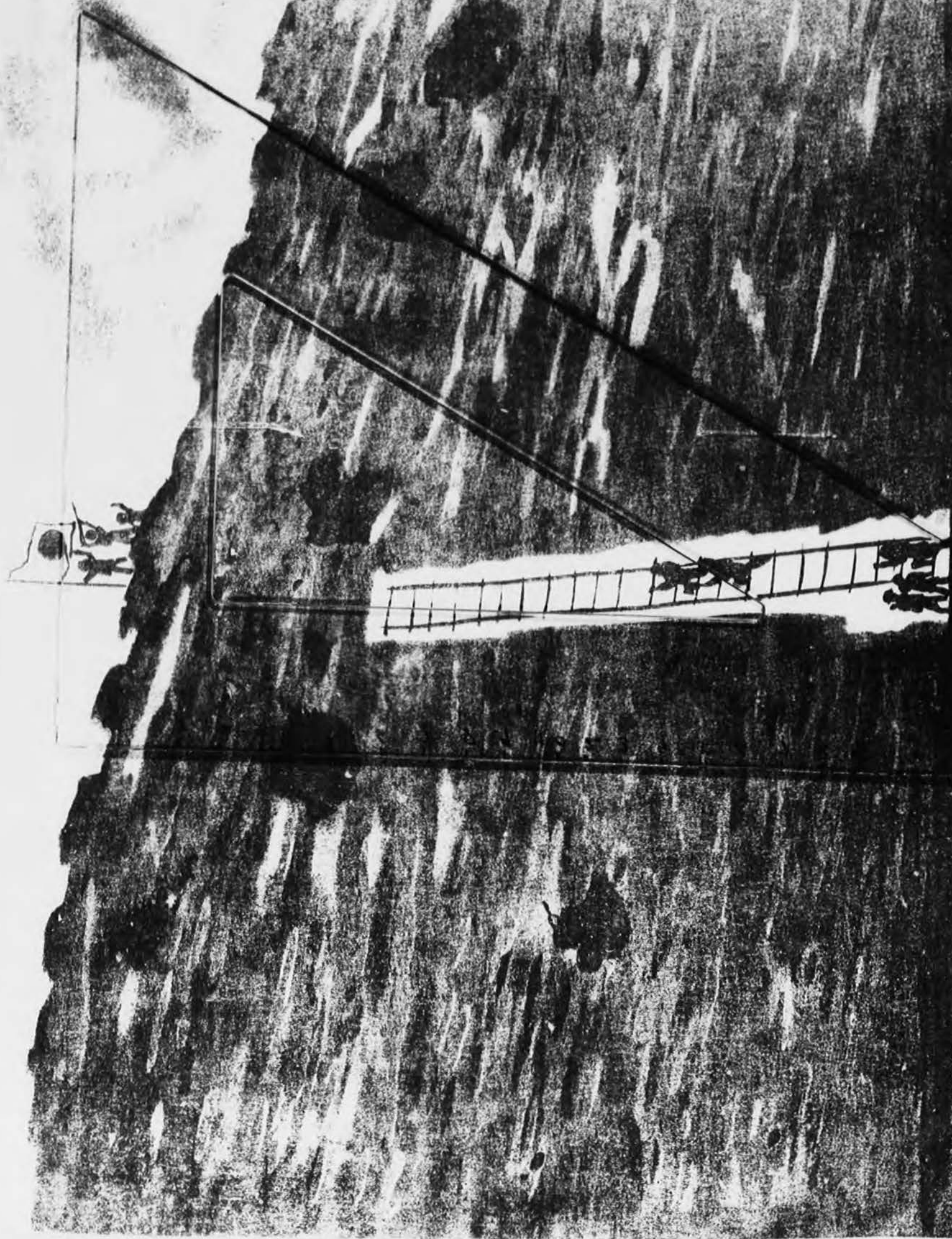
この切立つたやうな數メートルの城壁が

一體何によつて登つたか。

必勝の意氣 必勝の信念、これが

この人間離れのした力を振はせたのであつた。

(お く)





7117

それなのに

根もなぐ噂話を喰ひまはり、

戦時として盡きまへの物足や窮屈さを見て

いかにも日本が弱つてゐるのに考

政府や當局の言ふことは信ぜなくても

外國のスピーのまきちらすウツ話して喜んで聞く

自分で自分を信ずることのない

かういふ人たちが

意外に多いのではないで

足下が危い！

ほんちに危い！

1 4 3 2 1 0 9 3 2 2 1 1 2 2





1717

7117

その懐^{ふところ}手^てを出^だせ！

足^{あし}をしつかり 大地^{だいち}につけろ！

自信^{じしん}を持^もて！

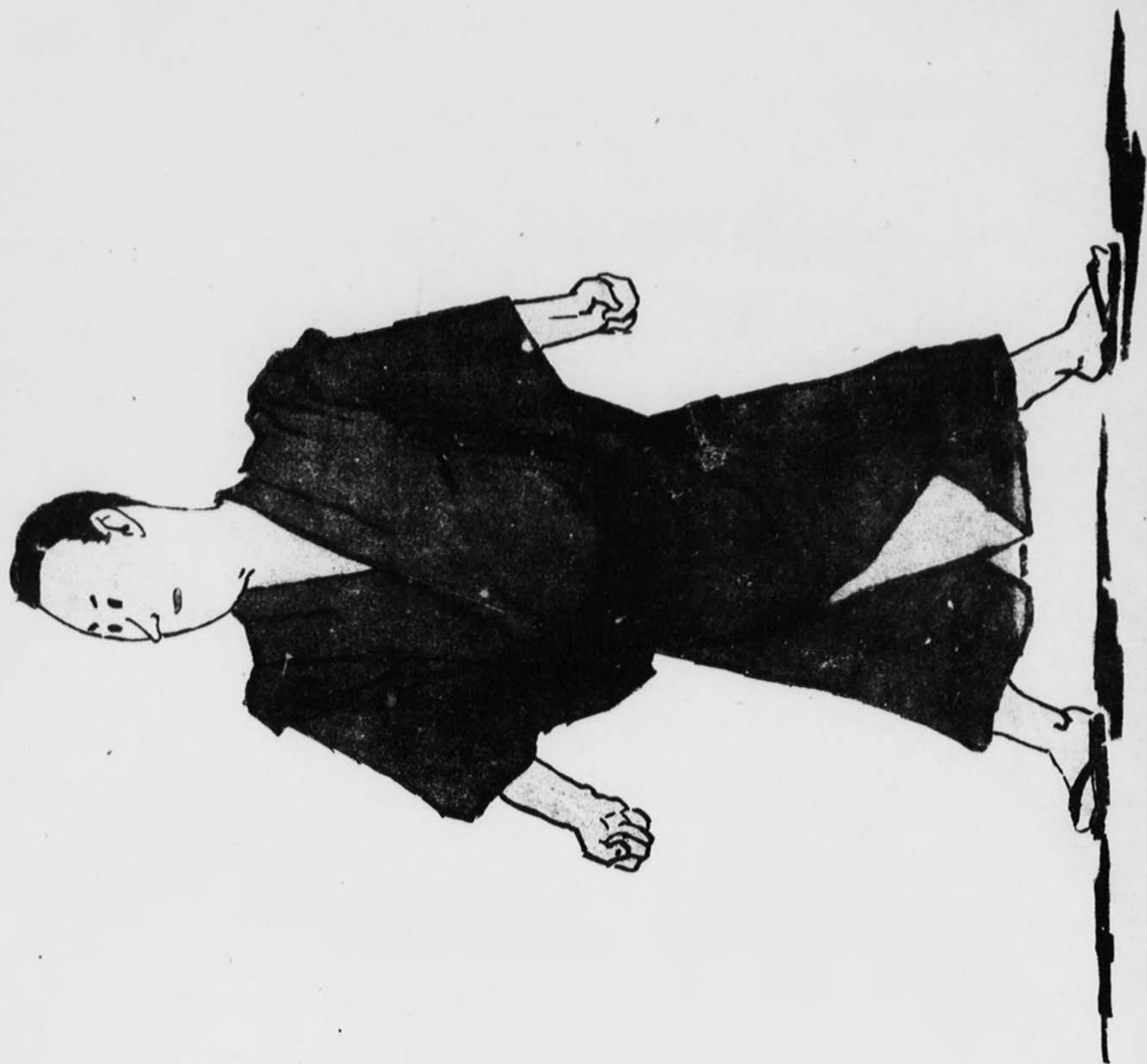
外国^{ぐわいこく}は 日本^{にっぽん}の國民^{こくみん}がうくして

國^{くに}の内^{うち}が こたつくのを待つてゐる。

國民^{こくみん}が自信^{じしん}を失^うつて 逆聲^{さかごえ}を出^だすのを待つてゐる。

(きつとぬきながら)

何^{なに}業^{わざ}！





驚くものか！

日本江漢

力がある。

タイ・佛子廟亭子、方丈、大雄殿。

その後、秘められた實力、思へ！

心を冬、^{ニハコ}ニハコめ

(2 2 2)



7117

負けるものか！

驚くものか！

日本は強い

力がある。

タイ・佛手調子、まだ大いによー

その後認められた實力、思へ！

心を大に引き締めよ

(お　は　く)





砲弾の下では 一心同體

まづ 実行！

否も 應もない。

たゞ まつしぐら！

この意氣 この心で

(ぬきながら)

全國民が 一億一心





わき目もふらず

大政翼賛運動に邁進する。

今は 戦争の真最中だ

爆弾は頭の上にぶら下つてゐるのだ！

この心構へて 性根をすゑて

ひくともしない舉國一致の日本の國を打固める。

これこそ この歴史始つて以來の非常のときに

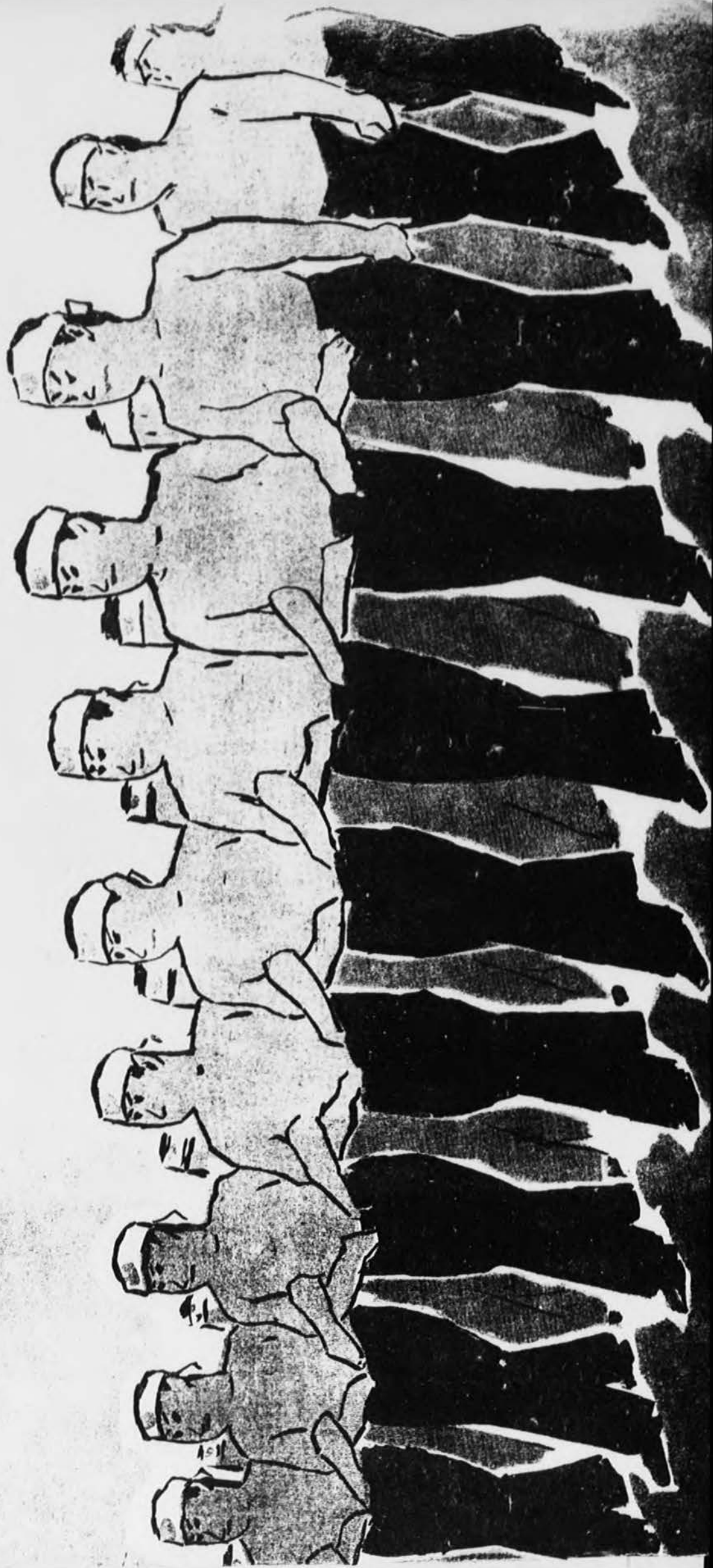
日本國民がかりつばに生き抜いてゆく

たゞ一筋の途なのです。

(終)

Ex. 145

體心



合球群系育教本

「國民に懃ふ」より

脚 本 日本教育紙芝居協會
繪 畫 野々口 重
製作 日本教育紙芝居協會

(表 証 の 説 明)

「^に本^{ほん}に、^い戦争^{せんそう}をしてゐるのだ。
爆^{ばく}弾^{だん}はもう頭^{あたま}の上^{うへ}にぶらさがつてゐるのだ。
わがり^{わが}兵^{へい}つたこゝです。
し^しかし、

また一發の彈も喰つた。このない一般國民は

(5 走 ながら)

かゝるものは、このわが世つたところを
 驚かすものではないでせうか。

戦争してゐるのだ
十九枚 挿込二枚

昭和十六年七月二十日發行

だのゐるゐてし争戦

【有所權版】

東京市牛久保院土八幡町八番地
編輯者 佐 木 秋 夫
東京市神田區東松山下町三十番地
發行所 相 馬 正 男
東京市神田區東松山下町三十番地
發行所 日本教育書劇株式會社
東京市京橋區榮地二丁目八番地
印刷者 岩 尾 篤 一
東京市京橋區榮地二丁目八番地
印刷所 一 九 堂 印 刷 所

東京市神田區一ツ橋 教育會館内

日本教育紙芝居協會作品

電話九段自四一五一番至四一五五番